

8-3

主題 返ってきた逆デイサービス

アクティビティ活動

副題 利用者の笑顔がみたいから

地域交流

研究期間 9ヶ月

事業所 特別養護老人ホーム博水の郷

発表者：吉田ひとみ、石原耕治、小暮貴博

アドバイザー：佐藤朋巳、片桐恵子

共同研究者：斉藤優、榎本茂利

電話 03-5491-0340

メール tomo@hakuuininosato.or.jp

FAX 03-5491-0343

URL http://www.oomishima.jp/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

平成14年開設の特別養護老人ホームです。
世田谷区西側の多摩川を臨む場所にあります。
従来型44床とユニット型46床の複合型施設です。
都内では珍しい、1フロアに従来型とユニット型が混在している施設です。
博水の郷のサービス方針：「あなたらしい生活と生き方を支援します」

《研究前の状況と課題》

- 以前行っていた逆デイサービスが休止していた。
- 日々の業務が多忙だということを理由に入所生活がルーティン化し、アクティビティサービスを提供できていない。
- 利用者の生活歴やその思いに沿えていない部分がある。
- 毎日の生活の中で同じ人、同じ職員と顔を合わせるだけで、交流範囲が限定的になっている。
- 外に出る機会が殆どないため、地域との交流が疎かになっている。
- 施設内で徘徊や帰宅願望の強い利用者がある。
- 利用者やご家族に外出やアクティビティについてあまりニーズを聞いていない。

《研究の目標と期待する成果》

- 逆デイサービスを中心にアクティビティサービスを実施し、刺激ある生活を送ってもらう。
- 逆デイサービスを開始して普段まったく出来なかった家事や買い物をする事によって意欲が沸き、楽しみが増える。
- 施設から出ていく事により社会の中で生活している事を再確認して自信を取り戻して頂く。
- ご本人の希望に沿った、外出・外食を行い楽しみを増やして頂く。
- 徘徊や帰宅願望の強い利用者にも外出等のアクティビティサービスを提供し、楽しい時間を過ごして頂く。
- 外出やアクティビティについてご家族と意見交換する事が出来るようになる。

《具体的な取り組みの内容》

- 十分なアクティビティサービスが提供できていない状況があり、職員の思いから委員会を結成。
- 委員会の中で様々な話し合いを行った。
- 利用者やご家族に外出やアクティビティについてニーズを聞く。
- 逆デイサービスは特養から利用者を2名お連れしてマンツーマン体制で月に2回、グループホームに行く。
 - ・献立会議に参加させて頂き、昼食の内容を検討する。
 - ・グループホームの利用者と昼食の買い物に行く。
 - ・グループホームの利用者や職員と一緒に調理を行う。
 - ・外出して近くのデパートにお茶を飲みに行ったりと普段の特養の生活の中で出来ないような事を体験した。
- 普段、粥・極刻みを食べているご利用者が、入所以来初めて寿司屋へ外食。
- 動物好きの利用者を集めてアニマルセラピーの実施。
- レストレン、カフェ、デパート等の外出計画を増やした。

《取り組みの結果と評価》

- 逆デイサービスを実施したことで利用者残存能力が引き出され、活き活きとした姿と笑顔がみられた。
- 外食や外出に参加された方からは、「また外食に行きたい」「今度は蕎麦が食べたい」との声が聞かれた。
- 施設内でのアクティビティ活動も充実しはじめ特養全体の雰囲気明るくなった。
- 数名の方のニーズに応える事は出来たが、ご本人との意思疎通が難しい方の場合は積極的にご家族に希望を聞く等して取り組む必要があると思う。
- 外出するという課題については、ある程度達成出来たが、もっと地域交流が出来るように取り組む必要がある。
- 対応に悩んでいた利用者が逆デイサービスに参加する事で、何に対しても意欲的になってきた。

《まとめ》

- 委員会を立ち上げることによってアクティビティサービスを計画的に実施する事が出来た。
- 日常生活の中でちょっとした工夫をすることにより利用者の笑顔が増えた。
- 地域に出る事で職員も利用者も色々な出会いがあり継続的な交流につながる取り組みとなった。

《提案と発信》

利用者やご家族には、様々なニーズがあります。
そのニーズに応える事は、私達の役目であり責任です。
まだまだ不十分な部分もありますが、施設に入っただけから出来るだけ「自分らしさ」を発揮して頂けるような工夫や努力を惜しまない事が大切だと思います。

【メモ欄】追加資料 有 無